１９４５・夏・神戸

辻　憲男（文学部教授）

神戸にゆかりの作家といえば、村上春樹、宮本輝、陳舜臣、田辺聖子、野坂昭如、灰谷健次郎といった名前がうかぶ。文学史上では、谷崎潤一郎、遠藤周作、島尾敏雄、稲垣足穂、椎名麟三らがいる。共通しているのは、山と海の間に開けた都会のモダニズム。大阪のような土着性はなく、京都のような風土性はない。傾斜地特有の空間性か。根っからの神戸人はもちろん、よそから来てよそへ去った人も神戸を忘れない。離れてもわが故郷。

そういう“神戸ぐるい”の一人、野坂昭如（のさかあきゆき）は石屋川の近くの小学校に通った。鉄棒前まわり46回の記録をつくった日、太平洋戦争が始まった。6年生の時一王山十善寺の裏山で大きな水晶を見つけ、それは疎開して行った女の子にやってしまったが、いまでも自分だけの秘密だ。昭和20年の空襲で町は焼け養父母を失った。15歳の少年は妹をおぶって石屋川の堤防にのぼった。「御影公会堂がこっちへ歩いてきたみたいに近くみえ」た。車を引いて西宮の夙川まで逃げた。小説「火垂るの墓」の兄ちゃんほどやさしくはしてやれなかった。妹は終戦直後になくなった。

住む人にとっては山と海というより、坂道と川の町である。野坂少年は一日かけて、石屋川、住吉川、芦屋川を越えて行った。三つの天井川は景観までそっくりだ。後に書いた長編『一九四五・夏・神戸』はこの川と道の説明に始まり、6月5日の大空襲の日で終わる。

御影公会堂は１９３３年に建てられた。“阪神国道”は国道２号線の通称。